

第 8 回フィリピン健康研究週間で発表しました。(2014/8/12)

場所：Radisson Blu Hotel, セブ、フィリピン（遠隔参加）
テーマ：「災害と健康危機管理における保健医療の研究と開発」

8月12日（火）に、フィリピン、セブ島で開催された第8回フィリピン健康研究週間(8th PNHRS)が開催され、江川新一教授は GoToMeeting というテレビ会議システムを用いた遠隔参加にて東日本大震災の教訓から、医療がどのように備え、被害を受け、活動し、備えるべきかについて招待講演を行いました。

発表したセッションは 1 日目午前中のパラレルセッション2『人災・自然災害における対応』の中で、前半は米国の疾病管理センター(Center for Disease Control: CDC)から Dr. Geroncio C. Fajardo がバイオテロリズムに関して White powder をキーワードにしてデジタルメディア、CDC, FBI のもつデータを検索した結果を解析し、バイオテロリズムの情報が必ずしも省庁間でも共有されていないこと、国家の危機に関係するような情報は極めて扱いにくいことが示されました。江川教授は、炭そ菌が確認された場合に公表するかどうかについて質問したところ、国家機密扱いとなって公表はされないという答えでした。

江川教授は東日本大震災前のわが国のリスク減少として建築基準や防潮堤、早期避難などの社会対応、わが国の災害医療体制の備えについて説明し、実際の災害後の健康被害の変化、災害対応におけるコーディネーターの役割、受援力などの医療対応の変化、被災地の中心に位置した大学としての東北大学と災害科学国際研究所の役割、仙台で開催される国連世界防災会議とHFA 2について講演しました。

会場には医療従事者、医学研究者、健康に関する政府関係者からなる約 60 名の参加者がおり、積極的に質問がなされました。スライドは遠隔から送るはずでしたが、通信状況が予行演習とは異なり、現地でPDFを提示してめくってもらっての発表でした。テレビ会議システムの技術的問題を解決しながらではありますが、現地まで行く時間と経費・体力を節約し、かつ聴衆に満足してもらえたと思います。情報のやりとりには必ずバックアップ手段が必要だという教訓でもあります。時差の少ないアジア各国とのテレビ会議による情報共有はこれからますます盛んになっていくと思われます。



セブ島の会場の様子



講演する江川新一教授

文責：江川新一（災害医学研究部門）